

(様式第1号)

■ 会議録 □ 会議要旨

会議の名称	令和7年度第2回芦屋市スポーツ推進審議会
日時	令和8年2月16日(月) 10:00~11:30
場所	芦屋市役所東館3階中会議室
出席者	会長 松尾 信之介 副会長 青野 桃子 委員 和田 由佳子 中道 莉央 関 めぐみ 國廣 正則 和泉 淑子 矢持 美佳 武久 伸男 下條 純 浅田 陽一
欠席者	委員 西原 美津夫
事務局	スポーツ推進課長 高橋 正治
会議の公開	■ 公開 ----- □ 非公開 □ 一部公開 会議の冒頭に諮り、出席者11人中11人の全会一致により決定した。 〔芦屋市情報公開条例第19条の規定により非公開・一部公開は出席者の3分の2以上の賛成が必要〕 <非公開・一部公開とした場合の理由>
傍聴者数	0人

1 会議次第

- (1) 開会
- (2) 審議会運営に関する諸事項
- (3) 報告事項
- (4) その他
- (5) 閉会

2 提出資料

- 資料1 会議次第
- 資料2 委員名簿
- 資料3 特定非営利活動法人芦屋市スポーツ協会資料
- 資料4 芦屋市レクリエーションスポーツ協会資料
- 資料5 スポーツ推進課資料

3 審議内容

(1) 開会

松尾会長：開会のご挨拶

(2) 審議会運営に関する諸事項

事務局高橋：審議会の成立、審議会の公開、傍聴希望なし、議事録の公開について説明。
審議会および議事録の公開について「異議なし」で承認される。

(3) 報告事項

松尾会長：令和8年度特定非営利活動法人芦屋市スポーツ協会の補助金についての報告を行います。事務局より報告をお願いします。

事務局高橋：120万円の補助金申請について、審議会で承認されたため財政部に予算要求しました。結果120万円の内示があったため、3月議会で承認されれば執行可能となります。

松尾会長：ただ今の報告への質問がある方がいらっしゃればお願いします。
特にないようですので、令和8年度の特定非営利活動法人芦屋市スポーツ協会の補助金についての報告は以上といたします。
次に令和8年度芦屋市レクリエーションスポーツ協会の補助金について事務局より報告をお願いします。

事務局高橋：レクリエーションスポーツ協会につきましては、市の補助金要綱改正に伴い、今までの団体補助は困難であると前回の審議会でご説明しましたが、結論が出ず、協会から事務局へ補助金支出の根拠となる追加資料を提出のうえ再審議となっておりました。その後、事務局と協会の協議の結果、協会は令和8年度の補助金申請はしないという結論になりました。

松尾会長：前回、補助金を出すか出さないか、公正というか、ただただお金を渡している
と見えないように、何に使うかという申請を、もう少し実績とかを含めて提出
してくださいという説明をして、継続審議にさせていただきました、申請を受け
て再審議となっておりましたが、申請はしないという申し出が事務局にあっ
たところです。

ただ今の報告への質問がある方がいらっしゃればお願いします。
特にないようですので、令和8年度芦屋市レクリエーションスポーツ協会の
補助金についての報告は以上といたします。

(4) その他

松尾会長：続きまして、事務局よりスポーツ推進課が実施する事業について、各委員か
らご意見を伺いたいという要望がありました。
事務局から説明をお願いします。

事務局高橋：第2期スポーツ推進実施計画については、ご出席いただいている学識委員を

中心に多くの時間を割いていただき、推進計画の答申内容を踏襲したうえで作成いたしました。実施計画では従前からの事業を継続することを基本方針としておりますが、マンパワー不足、業務の多様化、働き方改革やイベント参加者の減少・マンネリ感、熱中症による夏場のイベントの自粛などで、実施計画の主旨から外れない範囲での事業のスクラップアンドビルドの必要性を感じております。また、行政が実施する以上、市税での実施となりますので、コスト意識の必要性は不可欠だと感じています。

今年度は事業のスクラップや合理化を進めてまいりましたが、新規事業等は広く皆様のご意見を頂戴できたと考えております。

どんなご意見でも、助言でも結構です。委員の皆様にごつくばらんにおっしゃっていただければ大変ありがたく思います。

個人的には20代、30代の若い方の参加率の向上、高齢者や障がいのある方にも楽しんでいただけるようなeスポーツの展開ができればと考えていますが、eスポーツについてはいろいろハードルが高いと感じています。

松尾会長：ご意見がある方からお話いただければと思いますがいかがでしょうか？

和泉委員：こういった事業にスポーツ推進委員としてお手伝いに行くことが多いのですが、参加者が思ったより少なく残念な思いをすることが多いです。

あまり関心がない層や高齢者の一人暮らしの方に地域交流の機会を作る手段としてスポーツを使えたらと思っているのですが限界を感じています。

そういったアイデアも教えていただきたいです。

松尾会長：どのような手段を使って告知ができているかが関係しているかと思いますが、現段階では時期や中身の充実を考えてもターゲット層に届いていない様子。そのあたりに届けるのが難しいという状態でしょうか。

和泉委員：あとで言ったら「そんなイベントがあったのか」という方もいらっしゃるのですが、実際には声を掛けたら来たいと思ってくれる人も実はいるのではと思っています。

松尾会長：情報が手元に届いているかという観点でいくと、皆様の実感としてはいかがでしょうか。

国廣委員：スポーツ協会としては、市の広報が広く市民に知っていただくために有効だと思っています。ただ、紙面の都合や準備期間の制約もあり、掲載しづらいという実情もあります。そこが改善されれば広報の一つとして使いやすいと思います。

また、自治会さんは各町に掲示板をお持ちなので、そこに掲示させていただくことができれば、いろんな人の目に触れる機会を増やせるかなと思います。

松尾会長：情報を届けたいターゲットと、使っている手法があっているかも大事ですね。広報紙の全戸配布やホームページを見てもらう古典的な方法では思っているほど広がらず、たくさん掲載するために一覧にすると目立たなくなってしまうこともあるだろうなと思います。

子どもや赤ちゃんのイベントは掲示板を見て参加される方もいらっしゃるの
で、自治会の掲示板は連携していくのが望ましいですね。

和泉委員：自分で情報を入手できない方々には情報が届きづらいです。民生委員さんに
口コミの形で伝えてもらうことはできるのでしょうか？
その場合は私たちから直接依頼するのでしょうか？

松尾会長：もしそれが可能であれば行政から依頼する形にはなりそうですが、どうなん
でしょう？
ただ、たくさんの方から依頼がくることになるのも難しそうですね。

青野副会長：ちなみに新しく来られた方はどういった経緯で来てくださってるんですか？

和泉委員：知り合いに行こうと誘われた方が多いかなと思います。どこかにつながって
いる人はそうやって呼んでもらう機会があるので。

青野副会長：だからこそ、つながっていない方に来ていただきたいということですね。

松尾会長：そうです。ターゲットに情報を届ける手段が難しくて。スポーツに限った話
ではなく、行政の情報発信でもきっとそうだと思いますが、広報紙やSNS
を使って広報をしても本当に届けたい人に届いているかが課題です。

青野副会長：どこどこを組み合わせるとターゲット層に情報が届けられるのかわかれ
ば知っていたら行きたかったのという方に届けられていいですね。

松尾会長：芦屋市にお住まいの皆さんが、普段生活をしていて自分への情報の届き方が
もうちょっとこうだったら見やすいなというところがあればリアリティがあ
るのかなと思います。

武久委員：私がお他市で実施した企画の資料を作成してきたのでお配りします。今回例示
するのは宝塚市で実施しているフェスティバルについてです。地域活性化を
目的としたイベントですが、各種団体に模擬店を出していただいて横のつな
がりを持っていくのも大切だと思います。そんな感じで盛り上げつつ、各競
技の紹介や体験会も盛り込んでいくのもいいかもしれません。各団体に参加
してもらえば、打ち合わせの中で話が盛り上がり交流にも繋がります。集
客についても色々試してみましたが、いかに対象とする人に会うか、情報を
渡すかが大切でした。
今は市から補助金を貰って実施していますが、赤字での実施になっています。

松尾会長：すごく個人の努力で成立しているなどお話を聞いて思いました。行政的にお
金をばらまいてイベントを実施してくださいということは時代的にも難しい
と思うので、告知の補助や手段の提供といった部分に協力できるといいです
ね。まず目先でできそうなのはお話を聞いているとイベントの横断的な協力
でしょうか？

青野副会長：共催や同時開催みたいなことができるものですね。

武久委員：イベントを合体させると、うちも一緒にさせてくださいという声がかかったりします。そうすると、まち全体が盛り上がっていくという点でも効果があります。

松尾会長：矢持委員はいかがですか？ご自身の活動を通じての日頃の実感を含めてでもご意見を頂ければと思います。

青野副会長：どういったところでご苦労されているのかといった点についても教えていただけたら。

矢持委員：自治会で実施している夏祭りがあるのですが、運営されている方が高齢化してきていて来年は実施できるのかといった懸念があります。

松尾会長：確かに短期的に今まさに来てほしい人に情報を届けて来てもらう部分と、中長期的にすぐに成果は分からないかもしれないけど、若い人にも参加してもらって芦屋に住むのいいよねって思ってもらえるような我々の中で成果として見えないぐらいスパンが必要な部分とどちらも必要なんでしょうね。
若い人を巻き込むとかイベント横断という、部活動の地域展開も始まりまずし、手を挙げてくれた団体に広報活動の仲介だけでも協力してもらおうとか。いきなりイベントを一緒にやるよりは、子どもがチラシを持って帰って興味を持つ親もいるかもしれませんし。ここで頑張っている人が単発のイベントで広報してとかはちょっと無理があるんだろうなという感じはしますよね。

青野副会長：連携できるところと、既存のイベントを育てていくのも大切ですね。

松尾会長：行政的には難しいかもしれませんが、スポーツ推進事業の中で出ているイベント以外にも連携できるという部分は理想論としてはあるんでしょうけど。なかなか横断的な協力を実際に行うとなれば難しい作業も出てくるかと思いません。

ウェブ参加の先生方も、先ほどの情報を届けるという観点でもいいですし、純粋にこの事業に対してのご意見でもいいですし、何かあれば。

関委員：ジェンダーを研究している立場から発言させていただきます。現在、性別によってスポーツにアクセスするハードルが異なっていると思いますので、スポーツ施策におけるジェンダー平等は、私自身はすごく課題だと思っています。例えば、女性や性的マイノリティの方々のスポーツ参加率の低さに関しては、生涯を通じた健康づくりのために、地域での運動とかスポーツ参加を促進することが大切になってくるので。そのために皆様が実施して下さっているイベントももちろん大切ですが、それと同時に日常生活の延長にある普段の運動も大切です。なので、環境や施設の整備をお願いしたいという気持ちがあります。

芦屋ならではの自然や地形を生かしたイベントも考えられますし、芦屋市で策定しているほかの計画との横断的な連携を意識するのもいいと思います。

例えば、名古屋市の計画では「性別、年齢、障害の有無、経済的事情、地域事情等に関わらずすべての市民が、「楽しさ」や「喜び」を感じながら、スポーツへ自発的に参画する機会を創出します」という記載があるんですけど、その部分を意識して所管課だけで完結せず、様々なアクターによる関与があるといいのではないかと考えています。

イベントについての話題で、時に20代30代の人々の参加が課題だという話があったんですが、例えば甲南大学ではウォーキングチャレンジというイベントがあって、全国の大学から参加者の合計歩数で地球から月まで二往復することを目指すイベントがあります。それは自分の携帯の歩数計で、どれぐらい歩いたかを大学ごとに競う感じでやっているのですが。そういったチャレンジは、それこそ10代20代の学生さんも気軽に参加してもらえますし、こういうものがあつたらいいんだろうなと思います。実現可能かはわかりませんが、若者を取り入れられるし、一人でも参加できるというイベントとしてご参考までに紹介します。長くなりましたが以上です。

松尾会長：和田先生や中道先生はいかがでしょう。

和田委員：私からは、イベントを拝見していると、すべてその場に行って体験したり、体を動かすことが前提になっていると思います。スポーツへの関わり方は様々あると思うんです。カヌーや障がい者のことをされていても、そこに対するリテラシーがなければ関心は高まらないし、有識者の方もいらっしゃるのでも、座学や講演会みたいなものも開催してみてもよいのではと思います。例えば、来月にスポーツ庁で事例を学ぶ国際大会招致開催成功の秘訣ってことで、裏話やどうしてこういうことが導かれたか。その中で障がい者スポーツの現在地みたいなのが分かっていたら、障がい者スポーツのコミュニティも参加してみたいとか、もう一つの扉が開いてくると思います。こういったことは芦屋市さん単体で実施するのは非常に難しい部分もあるので、大学や企業と組んで公開講座やオンライン講座をして、そこに来られる方々を対象にチラシをまいたり、次のイベントで体験ができますよという告知をしていくと少し建設的に参加者を増やせるかと思います。身近に阪神タイガースもあるので、「なんで巨人阪神って伝統の一戦って言われてるの？なんで無条件でこんなにお客さんが入るの？」という切り口から市民講座を組むことで、大学生の窓口が開いたり、学校と組むことで保護者の方にも来ていただけます。地域連携で言えば、地域の子どものラグビー指導で学校が少ない中でも地域チームを作って花園に行こうと取り組んだりしています。そういった取り組みをしている方を招待して、地域連携スポーツのあり方の一事例として学んでいくといった気候に関係なくできることもあるかと思いますので、意見だけ申し上げます。以上です。

松尾会長：中道先生もぜひ。

中道委員：障がい者スポーツに関する立場から、少しお話させていただきます。「しょうがい者とのスポーツ交流ひろば」って取り組みを既に実施しているのですが、参加者が小規模で固定されている印象を受けています。そういった現状から、障がい者スポーツが福祉の領域にとどまっている状態

にあるかなと思うので、それをより地域に展開していくことと、前回の調査の時に認知度は高くても具体的な関わりをしている方が少ないので、市民が関われる入り口をもっと見やすくしていくところはやっていけるのかなと思いました。

滋賀県や京都市では、地域にあるスポーツクラブに福祉センターから届けに行く出前型に取り組んでいらっしゃる。指導者の確保が課題になってたりするので、そこは県が予算をつけて取り組みやすいようにしていったりしているので、そこも参考になるのかなと思いました。

横断的な協力では市民の方が段階的にかかわっていける仕組みとして、既存のイベントにインクルーシブスポーツ要素を取り入れてみるようなきっかけ作りが草の根運動にはなりますが大事じゃないかと思います。

そういう意味で、障がいのある人に対して安心して参加できる場を作っていくことと、インクルーシブな機会を作っていくことは分けて、同時に考えていく必要があるかなと思っています。そういう意味で、障がい者スポーツを地域により自然に展開していくことが今後の方向性として大事なところかなと思っています。

ここからは少し雑談みたいになりますが、体力測定を例に挙げてお話しすると商業施設で実施したりすると、普段体力に関心のない方に来ていただいたり、親子で取り組める内容であれば子どもの前で親が必死に頑張って、体を動かさなきゃという意識が変わったりするので、結構うまくいっている事例かなと思いました。あと、どんなイベントをするのかというときに、スクエアポッチャであれば、人の出入りが多いところでも人を待たせることなく回せますし、ゴールボールやスポーツウエルネス吹矢であれば若い人の掘り起こしを考えているので、横断的協力として障がい者スポーツ団体と連携して行うことで難しい部分もあると思いますが突破口になったりするかなと思います。以上です。

松尾会長：様々ないいアイデア、挙げてもらおうといっぱい出てくるんですけど。いざ実施しようとなると、行政主導ではマンパワー的に難しい。純粹に今の組織形態的に行政が中心になっては結構難しい。これは何年も見ても難しそうだなとも思うし、時代に即してもないし。あとは、いかに民間や地域を巻き込むとかいろいろなことをしないとかなかなか。

減らすのは簡単ですけど、増やすのは結構難しいと思うんですね。今の話の流れで行くと、子どもとか福祉、障がいのところで行くと下條さん。いかがですか。

下條委員：中道先生のお話もあったので、2点ほどお話をさせていただければと思います。

今年度はデフリンピックが日本で初めて開催されて、すごく機運が高まりました。僕もいろんなイベントに参加させていただいた中で、イベントに参加することがスポーツを知るきっかけになるかなと思いました。競技を知ること、競技の内容を聞くことで自分自身も興味を持つことができたので。社会全体で盛り上げていこうとなったときにそういった取り組みをきっかけにスポーツを身近に感じることをできたらかなと思っています。

2点目は、それに伴って、スポーツをすることだけが目的ではなく「見るス

ポーツ」もあります。スポーツをやるだけじゃなくて、見ることで日常的にスポーツに親しむこと。これがもしかしたら中長期的に自分がやってみようかなというきっかけになるのではないかなと思っています。

松尾会長：大きなイベントごとの旬を逃さないのは、確かに大事なところはあります。今年だと今まさにトリノオリンピックやってて、9月10月にはアジア大会とアジアパラがあったりするので。特定の競技だけではなくてという旬で行くと、アジア大会とかオリンピックなんかは種目横断的にしやすいところで。まずは見てみましょうとかだったら、パブリックビューイングをホールみたいところでやりましょう。その代わりにゲストを呼んで、その人が詳しく説明してくれますよとか。そういうことはそんなにお金もかからず運営スタッフもたくさん割かなくてもひよっとしたらできるかもしれないし。そういう意味でIOC、JOC関係です。オリンピックの夏冬とアジア大会なんかは囲碁まであるぐらいですから。そういう意味では幅広く活用できるのかな。そこまで活用しようと思うと、ちょっと前倒しで準備していかないとすぐに旬を逃してしまうということは今お話を聞いていて、ありそうだなという感じがしますよね。

青野副会長：マスタース、関西でありますよね。種目によってはもう少し低年齢から出られると思いますし、例えば目標を持ってチャレンジするのもいいですね。

松尾会長：意外とバレンタインランとかは結構若い人たちや家族で参加とかがあります。ただ、広域のイベントをすると主催者がなかなかしんどい。いきなりゼロから立ち上げては相当エネルギーが要る。けど、続けていかないと参加者が増えていかないものなので、1年目で人が少なかったから来年はやめましょうとすると、それで終わってしまうとかあります。そういう仕組みを行政で支えてあげられればいいですね。団体へのお金ではなくて、イベントへのお金みたいところがあれば。これは今年言って来年できるのかという難しいかもしれないですけど、予算立ての中で、そういったことが可能なのかと。例えばお金があげられなくても施設とか、ホームページに掲載されるとか。広報紙にほかのイベントより少し大きく載せてもらえるとか。金銭面以外でも協力できる部分を広げて行けそうなどころはあると思います。その程度の協力にしておかないと行政側がパンクして難しいこともいっぱい出てきそうな気はするので。どんどん主催者としてイベントを実施できればいいんですけど、それも難しいところですし。

青野副会長：防災関係とスポーツを絡めるお話が最初にあったと思うんですけど、例えばプロチームであればJリーグが分かりやすいですけど、「シャレン！」という形で社会と連携したスポーツチームが必要とされている時代なので、もしかすると、どこか地域と連携したいという団体もいるかもしれません。実際にする場合は大学も絡ませていただいてやってるんですけど、そういう形もあったりするかな。

松尾会長：基本的には、スポーツチームも民間事業者も皆さんウェルカムだと思うんです。どちらかというと、機会を探しているところも多いし、社会的には貢献

しなきゃいけないみたいなミッションが一般事業者にも課されていて。誰がどう声をかけるとか意外とシンプルなところで解決できたりはするのかもしれないですけど、お金をくれないとやらないよみたいなところは意外と少なくて皆さん協力的にやってくれます。

部活の地域展開も、部活がなくなるばかりが先出ちゃって、すごいネガティブな議論がされたような時期もありましたけど、結構たくさんの事業者が手を挙げてくれて、芦屋に協力しようとしてくれる方々がこんなにいる。そういうところも、何か巻き込んでいければいいですね。

浅田委員、いかがですか。

浅田委員：学校支援課の浅田です。先ほど松尾先生からお話があったように、部活動の地域展開をさせていただいていますが、芦屋市の62団体が手を挙げてくださっていて、学校の部活動が、運動部は令和8年7月末、文化部が10月末まで行いますので、その後に地域クラブを開始するという流れで進んでいます。

その上で悩みがございまして、子どもたちが実際に地域クラブに参加してくれるのかどうか、手を挙げてくださった方々がいらっしゃるだけにとても不安です。子どもたちに関心を持ってもらうために愛称を募集し、投票している段階です。導入としてイベント要素のものを加えて、来てもらえるような会になればいいなと思いながら進めています。

また、お話を伺う中で中学生たちの参画次第では高校世代、大人世代が随分変わってきそうな点から、地域展開が今後子どもたちにどれくらい関わってもらえる事業になるかの重みをひしひしと感じながらお話を聞いておりました。

松尾会長：62団体の中には、釣りやeスポーツなどのいわゆるトップ・オブ・トップのアスリートを育てる以外の要素もたくさん出てきていいなと思っています。

スポーツ庁はよくヨーロッパ型を目指してとありますが、ドイツの方に聞くと日本は学校でスポーツをやってくれていいよねと言われます。周囲の高齢化やボランティアコーチで支えていることが多く、地域で支えるのは苦しくなっているようですが、他国からは地域スポーツが発展していいねと言われる。隣の芝は青く見えるものですから。

今回はどちらかといえば芦屋に協力したいと思って手を挙げてくれた62団体の皆様ですかね。部活動の地域展開として手を挙げたものの、その人たちにとってみれば、別にどの層が来てくれても、どれだけ広がりを見せようがいいと思う団体の方もいるかもしれないので。

その中で、他課との連携に結び付きそうなものは課を横断して異種共催で展開する。名前を連ねるだけでもいいと思うんです。行政的には予算を組むのが難しくなるとかの問題があるかもしれませんが、そういうところを活用していけるといいですね。

武久委員：子どもの参加率はすごく減っていますからね。1割行くか行かないかぐらいの参加率の小学校もあります。まずはいかに楽しいと感じさせるかどうか。

その先に強さや結果が待っているんじゃないかと思います。そういった部分を考える指導者の問題もあるのかなと思います。上を目指すクラブチームもありますけど、学校とかのサークルはそうじゃないんじゃないかなというのが僕の感想です。将来的に続けてほしいという思いがありますので。

浅田委員：指導者の方がモチベーションを保てるのかなというところがありました。指導者の方が目的意識をもって地域クラブをしたいという形で手を挙げたが、結局目指しているような活動ができなかったときに、先ほど武久委員がおっしゃっていたように価値づけをどこに持っていきのかがとても大切なのかなと思っています。

体を動かすことや、いろんな人と触れ合うことに価値観があるならば、この会議そのものだと思うんですけど。大学生になっても大人になってもパッと繋がれる要素が出てくるのかなと考えたら、その価値観を始めていただいた指導者の方ともどれだけ共有していけるかが、大切ななという思いがあつて。

武久委員：大事だと思います。

松尾会長：まったくそうです。先ほど指導者の研修なんかもというお話もありましたけど、指導者をお客さんとして、その人たちにモチベーションを提供してあげるよりは、指導者としてそもそもの考え方、仕組み、それこそ単純に研修会やるとかも含めて、言い方は難しいですが下支えしてあげないと。ともすれば自分の成果がモチベーションの指導者って危ういですよ。

武久委員：大会で優勝したとかね。

松尾会長：そう。だから、何のためにこれやってるんだろうと思ったときに、自分の成果を求めてしまうチームや指導者がいるならば、早期に転換してもらわないと。ハラスメント的観点で危ういのもありますけど、スポーツに限った話ではないですが、相手がやる課題と自分の課題とはあくまで分離しておく必要がありますからね。どれだけ教えてもやるのは相手で、子どもたちがどうやるかがあくまで課題で。それが指導者の成果みたいなものになると、それをモチベーションというんじゃないですよというところとか。

支える事業とかを行政主導で、指導者とか対人関係をどうやって作っていくか。そういうことはやるけど、具体的な事業を行政がバンバン増やしていく方向ではなく、仕組みや指導者からの要請を支えてあげた結果、これがどんどん広がっていくみたいなのがいいかなと思ったりします。モチベーションをプレゼントするって難しいので。

そもそも外から来た動機付けなんて年代関係なく一瞬で消えてなくなるので。そうならないものをこっちでつくってあげて。個別のイベント自体は、盛り上がった結果、民間の人と協力してやりましょうとか、地域で協力してやりましょうとかが地域側からも民間側からも言ってきてもらえるような仕組みにしておきたいのかなとは思ってます。

こっちから地域の皆さんに、これどうですか、やりませんかって言い続けるのは続かないし、それこそマンパワー的にも厳しい。

事務局としていかがですか。個人的な率直な意見でも。

事務局高橋：ハードルの高いものから、取り組みやすいものまでいろいろとご提案いただいたのですが、今後の参考にさせていただければと思っております。

松尾会長：日頃やっててここが苦しいとか、スクラップ・アンド・ビルドとおっしゃっていましたが、増やすのって結構きついと思うんですね。

事務局高橋：おっしゃる通りです。増やすことに関してもマンパワーの問題があります。施設がほとんど老朽化してしまっている部分があって、そちらになかなかお金を使えないこともあります。関先生からお話があったように活動しやすい施設づくりになかなか取り組めていないのも非常にネックとなっております。ハード面についてもいろいろと変えていかないといけないなと思っております。

松尾会長：理想論としてはハードを充実させればいいですけど。例えば体育館をすごくきれいで立派なものに建て替えたとして、結局予約殺到で、いろんな団体に使ってもらえない。今でも、結構予約的には目いっぱいですよ。

事務局高橋：そうですね。

松尾会長：老朽化の使いにくさはさておいたとしても、今ある芦屋市の箱は、多分めいっぱい稼働している状態だと思うんです。

和田委員：途中聞こえないところがありましたが、地域移行と地域連携を進めていく中で、安全・安心を担保するという意味でも指導者資格や条件のクリアを独自に設けていくようなことは検討されているのでしょうか。

浅田委員：まず、地域クラブの基本方針を作成しまして、その中で免許所持の指定ではなく、ハラスメントや体罰、熱中症といった研修や、子ども理解に関わるような研修を受講していただくことによってご指導いただく形で検討しております。

といいますのも、ある一定の資格を設定してしまうと、子どもたちを指導できる受け皿づくりは難しいのではという判断をいたしましたので、いったん各競技では様々なコーチの資格があるかもしれませんが、我々の地域クラブに関して言えば独自の指定する研修を受講していただくことで子どもたちに向き合ってもらおう設計をしております。

和田委員：恐らく、いろんなもめごととか事故とかも起こってくるのが想定されるので、1回受講で終わりではなく、内容のアップデートをしていって、必ず受講していただくことをし続ける必要があるのかなと考えます。

浅田委員：そうですね。年一で多種多様な5つ6つの研修をどう受けていただくかというところを今考えています。

和田委員：ありがとうございます。

松尾会長：資格の必須化も一応議論には上がって考えたところではあるんですけど、スポーツのほうが設定が簡単で、意外と文化系の団体でハラスメントに該当するようなことが平気で起こったりとかするので。それを一律に決めるのもなかなか難しいところがあるので、研修でしっかり代替しようというところと、あとは1人で立ち上げはやめてくださいねにしたんですよ。

浅田委員：はい。

松尾会長：すごく熱心な方がいて尊いことではあるんですけど、1人で何かを教えるクラブを立ち上げるとトラブルになりやすい。あと事故やけがをを起こしたときに支払能力がないクラブも危険なので、ちゃんと保険の加入をしてくださいねとか、そういうことは設定されていてというところですけど。まだ始まってないのであれですけど、様々なことがクリアされて、どのクラブも軌道に乗ったとしたら、逆に言うとある程度信頼を置けるクラブが芦屋に関与してくれたと思うので、今度はその人たちに芦屋を発展させるほうに協力してもらうこともできるかもしれない。そんなつもりじゃなかったというところも一部はあったんですけど。

青野副会長：定期的な研修で、横のつながりも可能であれば広がっていけばいいと思いますし。今であれば学校単位でやってたので、各校の情報が部活の顧問を通じてある意味共有で来ていたと思うんです。部活でこういうことがあったのでとか、こういうことが心配でとか。それがバラバラになる部分もあるので、研修会の頻度だったりを検討していただいて、そのタイミングで横のつながりができると理想ですね。

松尾会長：最近、そういう仕掛けをしてあげて。つながりを持つのはその人たちの課題であって、我々の課題はつながりを持つきっかけを設定し続けるしかないんだと思うんです。つながらせてあげる、ではなくてつながらざるを得ないような環境をつくるとか、つながるきっかけになる研修会、その中身の設定の時にそういう仕組みにするとか。

武久委員：競技を超えてですね。

松尾会長：そうですね。手をつないで仲良くしてくださいねって、これをしてあげるわけではなくて。

武久委員：雑談はすごく大事なんです。研修がすべてではないと思います。

青野副会長：それこそ、それぞれの活動での困りごとを共有していったらもしかするとつながりが広がりやすいかもしれませんね。中学生にこうやって声掛けしたほうがいいのかという話は、多分共通してきいたりします。あと、例えばレベル感とかも、より競技性を高めたチームがこっちにあって、移籍は可能なんだろうかみたいなところも含めて。子どもたちが楽しくスポーツできるほうがいいので。そういう環境があれば、親御さん世代や親戚、近所の人というところにも

広がる可能性はありますよね。

武久委員：子どもを教えるときに、親御さんとの信頼関係ってすごく大事。もちろんリスクは高いですから、けがや病院に行ったりとかありました。でも親御さんとの信頼関係があれば、トラブルになりにくい。昔こうだったからはもうナンセンスなんです。指導者の考え方やあり方は本当に大切に、競技についてだけではない多面的な勉強が必要です。だから難しいなとも思います。楽しく明るくあれば、その先も当然やりやすから。

青野副会長：すごく先のことを言っちゃうんですが、指導者の講習会もある程度心理学の話というスポーツ以外にも波及できるような。市民公開講座とセットにするとか。指導されていない方にもすごく勉強になることなので、来ていただく機会を設けてもいいかもしれません。

武久委員：アドラーは怒ってはいけないが褒めるのもあまりよくない。人間は平等なので、同じ目線にいるのは大切ですから。

松尾会長：そこは軌道に乗ったらまた考えましょう。

浅田委員：今回で言えば資料5に記載されている令和7年2月22日開催予定の市民講座のところに地域クラブの指導者の皆様への研修もタイアップで入れてみたり。

武久委員：パネルディスカッションのようなことをしてもいいんじゃないですか。

浅田委員：そこまでは今回できないかもしれませんが、今後考えていく形で。

事務局高橋：冒頭に申し上げた指令管理者との共同事業という形で、シンコースポーツさんに講師をお願いしていますが、マンパワーの解消につながればという考えで実施しております。

下條委員：中道委員にお聞きしてもいいですか

中道委員：はい。

下條委員：2点ほどお伺いしたいのですが、前回の会議でも申し上げたんですけど、就学生の障がいのある人が、学校教育のフレームの中での部活動であれば社会参加の枠組みができていたと思うんですけど、学校から外れて地域展開となると、障がいのある子どもさんがなかなか参加しづらくなれないかなと思って。

地域展開に子どもがちゃんと流れていくかという部分に特別支援だったり障がいがある子どもさんはもう一つハードルが高いと思っているので、他市さんだったり他でうまく地域展開やいろんな団体さんに関わっていけるようなアクションをもしご存じであれば教えていただきたいです。

2点目は、子どもさんに限らず、障がいのある人の居場所になるようなスポ

ーツに取り組みたいと思っているんですけど。今実施している「しょうがい者とのスポーツ交流ひろば」はどちらかというと参加者が固定化されています。ポッチャはオリンピックの機運によって皆さんに知っていただけただけで障がいの有無に関係なく皆さんに取り組んでいただけてるんですけど、もう一つの種目であるサウンドテーブルテニスがなかなか取り組んでみようとならない中で、もう少し手軽に取り組めるような種目を「しょうがい者とのスポーツ交流ひろば」に取り入れられればと思っているので、もしご存じであれば教えていただければ助かります

中道委員：1点目についてですが、中学生、障がいのある子はかなりの課題だと思うんです。その子どもたちにとって教師の存在は大きくて、部活動の地域移行で学校から離していく中で、教師がいかに橋渡ししていくか、積極的な関わりは大事なと思います。

笹川スポーツ財団の報告書で、今現在障がいのあるパラアスリートが過去を振り返って、何でこれまでキャリアを形成できたかといったら、学校の先生の存在、周囲のサポートが大きかったの、そこは大事なところなんだなと思っています。

あと、受け入れ側が勝手にハードルが高いと思ってしまって、障がいのある子どものアクセスを無意識にちょっと閉じてしまっているところがあるかなと思うので、先ほどの指導者への研修で、ハードルが高くないということと、何か困ったときに指導者側がちゃんと相談できる窓口があるところは大事なところかなと思っています。

そういう意味で、滋賀県では障がいのある方の地域展開がうまくいっているスポーツクラブがこれから取り組もうとしているところに、親子の関係で師弟関係を結んで、何かあったときに相談という体制を整えているので、そういった枠組みを作っていくところはもしかしたら参考になるかなと思いました。

あと、具体的な競技に関しては、大学生にやらせても難しく、つまらないので終わってしまうところがあったりします。そういう意味で、スクエアポッチャや吹矢は学生にも受けがいいですし、障がいのある方ももちろんできるところかと思っています。

あと、既存のバレーボールに対して、シッティングバレーを抱き合わせでやってみるとか、サッカーにブラインドサッカーという要素をちょっと入れてみるとか、どこをターゲットにするかですけど、親スポーツがしっかりしている競技のお洗スポーツと一緒にやっていくことで、より参加者を拡大させていくところはあるのかなと思います。以上です。

下條委員：おっしゃっていただいた風船バレーとかは、障がいのある方もそうですし、高齢者の介護予防の中でもやったりするので、風船とバレーボールをセットしたりとか。この間フレームフットボールをやったんですけど、それもやっぱり障がいのある人もない人もともに参加しながら楽しくやってくれたので。参考になりました。ありがとうございます。

中道委員：兵庫県の障がい者スポーツセンターとか、そういうセンターに頼って相談して、センターも業務方の中で力を入れていたりするので、そういった情報で

あればお伝えできるようにしたいと思います。

下條委員：ありがとうございます。

松尾会長：なかなかいい時間になってまいりました。イベントそのもののアイデアもあれば、仕組みを支えるアイデア、広報的のところやどうやって情報を届けるのかみたいなのところもあったりして。これを聞いたからすぐに形にするのはなかなか難しいところではあるんですけど、徐々に活かしていただければと思います。

時間もありますので、いったんその他の議事は以上で終了とさせていただきますと思います。

これにて次第に記載のある議事はすべて終了となりますので、事務局にお返しいたします。

(5) 閉会

青野副会長：閉会のご挨拶

事務局高橋：以上を持ちまして、第2回芦屋市スポーツ推進審議会を閉会いたします。

以 上